

江花道子の詩と神秘

「紫羅帳裏(シラチョウリ)に真珠を撒(サツ)す。
破布囊裏(ハフノウリ)の真珠,知る者は正に知る、
是れ宝なることを。牛の飲む水は乳と成り。蛇の
飲む水は毒と成る。五雲(ゴウン)、常に擁して人
到らず、蕭策(ショウサク)たり、仙家(センカ)
の十二楼(ジュウニロウ)。」 (毒語心経)

禅の歴史上、偉大な禅師白隠慧鶴(1686-1768)
のこの詩句は江花道子の繊細な純粹さと詩的な感
興を強調するには適切と思われる。

彼女の小品と極小品の作品を見て、まず最初に受
ける印象は何か不可思議な理由で時の経過による
避けられない劣化から救われた大きな作品の断片
か、大きな広がりのある光景の細部かということ
である。

江花道子の作品には画材(金箔他)の豊富さ、鮮
やかな色彩(ラピスラズリの青)と、無理なく、
無意識に、作為的でなく自然に現れたと思われる
文化遺産(文字や禅画)からの貴重な典型的痕跡
がある。

あたかも時の経過がなかったごとく、どこから伝
えられたかわからないかのように、江花道子は空
想と現実、現実描写とフィクション、ヴェールの
ように薄い塗りと緻密に塗られた下地作りを画面
上で対立させている。

旅行携帯に適するような、ほとんど財布大の作品
を作ろうとしたごとく、極小サイズのアイコンに全
凝集。

手のひらの中に作品を隠そうとする誘惑とともに、
彼女の作品から新たな活力、一片のくつろぎ、空
想の断片を汲み取ろうと更に良く見てみよう。

5.5.2005

日本語翻訳

ルチャーノ ラヴァニャン
画廊 ラヴァニャン

サンマルコ広場 ヴェネツィア